

## 一台湾人の生き立ちと多言語環境

蘇仲卿

言語は人間の作り上げた文化的資産の中で、おそらく日常生活を支える最も重要なものである。言語学者ではない私見によれば、身振り手振りにかわる意思疎通の道具として、音声が使われ、群集的な同意規約の下に言葉が生まれ、やがてその言葉を表記する文字が発明されて、言語体系が成立したのだと思う。しかして群集生活社会による規約の基において成立したが故に、隔絶された生活集団の数だけ、違った言語が発生してもおかしくないし、また集団の分裂隔離が起これば、一つの言語が分化を起こしていわゆる方言が発生するのも当然であっただろう。

この地球環境に於いて、人類は *Homo sapiens* で命名されるただ一種言語を持つ生物である。然しながら、人間の文化が多種多様であるように、言語も多種多様である。言語が文化の代表とされるように、人間の族群なるものはよくそのしゃべる言葉によって識別される、例えば台湾では小はしゃべる方言の種類により福建系、客家系などと分かれるが、大は両方とも同じ言語の表記法を用いるが故に一括して漢語とする。漢語系社会で方言は百を超えると云うのに、言語の表記法が高い保存性を持っているのは、恐らくはその成立に多大な労力と知力の投入を必要とし、且つ又文学や詩の発生で洗練されたので、一層の温存効果を生んだのかもしれない。

以上の前置きは、言語と人間の生活文化は切ってもきれない、密接な関係があることを強調したいために書いた。従って一人の人間が、違った文化圏に飛び込む衝撃は、言葉の違いから始まる。移民とか留学とかで、生活環境を移す場合は、事前に言葉を習う事によってこの衝撃はある程度避けられる。しかし、突然社会全体が、何かの理由で公的使用言語を変えられた場合は、必然的に双語(bilingual)生活を強いられることになる。私たち台湾で育った人たちで、七十あたりの年齢層は、この一生のうちで、このような社会変遷を二度も経験し、学習と生活のために、二度も言語変換を強要された。それが故に多語(polylingual)能力を獲得したが、その為に払った労力は少なくない。台湾人の私が経験した事は、記録に値するものであると思うので、筆を取り上げた次第である。

### 家族の成り立ちと台湾語

私の父母は明治時代、日露戦争の頃に生まれた。日本領台よりおよそ十年後である。当時既に台湾子弟を対象にした公学校が設立されてをったが、父は四年で退学、母は一年しか就学していない。祖父は大陸からの移民第一代であるが、祖母の方はその先代から基隆港の懐に位置する山の裏側にある円窓嶺と

いう小さな盆地で、農業を営む集落に大家族で住んでいた。祖父は台湾茶を仕入れて対岸の廈門(アモイ)で輸出商に渡す仕事をしていた。それが日本領台のいざこざで、福建の家族に無断で台湾見物について来た従兄弟が、台北城での日本軍の匪賊狩りに誤って捕らえられ、殺されてしまう悲劇が生じた。一人を亡くしてしまった責任の重さは、気の弱い祖父には、考えられ得る親族の厳しい追求に到底耐えられるものではなかった。それが祖父をして1926年に六十歳でなくなるまで、やみがたき望郷の思いを抱きつつも、再び廈門の地を踏むこがなかった。

普通に台湾語とされるのは、閩南話とも云われるアモイ方言である。祖母の家族はアモイ語系の地域から移民してきたので、祖父との言葉の上での交流は何も障害が無い。母の出自もアモイ語系の家族であったから、我が家の母語はアモイ語である。母は日本語をマスターするに至らない歳で、学校を離れたから日本語は全然駄目であった。然しながら、商売用の四則計算には随分と長けていた。それも筆算ではなく暗算である。これは結婚後祖父に仕込まれたのであると言う。

祖父の台湾での最初の商売は、祖母の地元である瑞芳で始めた豆腐屋であった。豆腐屋は朝早く起きて、水で浸潤した大豆を石臼でひく仕事からはじまる。そして朝食の時刻には、出来立てほやほやの豆腐が顧客の食卓に届いていなければ商売にならない。このような重労働を父は嫌ったが、家業ゆえほったらかしにも出来ない。それで学校をおっぼらかしてしまったと言う。たまたま、当時瑞芳を貫流する基隆河で採れる砂金の源である露頭の発見で、瑞芳から山に上がった九份が新しい金鉱山として開発され始めるやいなや、今度は家業をおっぼらかして九份に一人で往ってしまった。金鉱採掘は技術と資金が必要だが、父は年少の身でどういようにしてそれを克ち得たか、恐らく非常な努力をしたことは間違いないと思う。気に入った事なら一心不乱に打ち込む父の姿は、はっきり私の脳裏に刻まれている。かくして、祖父母は独り息子に引きずられて、瑞芳から九份に移住する事になる。

## 台湾語家庭への日本語侵入

我が家にアモイ語以外の言語が侵入したのは、1930年、姉が公学校に上がった年である。勿論日本領台下の学校だから、日本語が教育の言語となる。父は四年で公学校を辞めているが、もともとは学問好きで、金鉱業に従事しながら、漢学塾に通っていた。私も子供の頃、父のアモイ語音でやる詩吟をよく聞かされた。学問好きというのは先生を大変尊敬する。盆や暮れになると、父は必ず母が商っていた酒とタバコを先生に届ける。私たち兄弟姉妹は優等生であったから、これは点数稼ぎのための賄賂ではない。日本人の先生方に、精一杯のよそ行き日本語で挨拶する父は、そばで見ている涙ぐましいものがあった。成長する子にあわせて日本語の我が家への侵入がピッチを上げていき、子

供と親の二世代で使われる言葉に徐々に差異が生じ、子供が九份を出て台北の中学に通う頃には、大変な段差が生じた。因みに終戦当時、私は祖母との会話は、聞いて判るが返事ができない有様であった。もしそのままの状態が続けば、母語喪失になりかねなかった。

## 戦後の言語大変換

1945年の終戦で、今一度急激な言語転換が見舞ってきた。1946年台北高校を離れて、台北帝大から改制して成立した台湾大学に入学するまでの間、私達は日本の先生方に続けて教えていただいたが、学校でも、新しく国語になった北京語を教えなくてはならない。然し先生が居ない。仕方が無いから、漢学塾の老先生を招いて、台湾語の学習でカリキュラムをごまかすような有様であった。終戦直後、台北高商のシナ語教授が、当時の吉見女学院で北京語の夜間学校を開いているのを知り、私は財布の底をはたいて貴い月謝を一ヶ月だけ払い、北京語の発音記号とその使い方を習い、その後は辞書による独学で新しい事態に対応した。

漢文は中学で習っている。その時の恩師松宮先生は、私に棒読みをする事を薦められた。だから古漢文の棒読みに慣れていた私には、北京語にある特有助詞を習えば、北京語を読む事は直ぐ出来た。問題は発音である。日本語でも漢字の発音は訓読みと音読みで違う。当時の私には、北京語の文は眼で読めても声を出して読むことができない。台湾語音で読めば、まさにちんぷんかんぷんである。大学を出た年(1950)、当時の台湾省政府が全台湾の専門以上学校の卒業生約一千名に対して、一ヶ月の就職前訓練を行った時、「作文」を競わせた。大陸出自の学生も数多い中で、私はなんと第四席を占めたのである。しかし、当時、自分の書いた文を音読してみろといわれたら、それこそ赤恥をかいたに相違ない。めまぐるしい時代の変遷の中であって、字で書く言葉を優先させ、口でしゃべる言葉の学習を遅れさせたのは、私としては時間との競争に勝つための、精一杯の生きる知恵であったのである。後日子供たちに親父また変な発音をしたと言われる事が多い。六十歳になってから、北京語の発音で漢字のキーインをすることを始めてから、やっと本格的な漢字の北京語読みが出来るようになった。思えば長かった北京語との戦いであった。

以上のように、台湾語は親から伝承され、日本語は日本の学校で正規に習い、北京語は手ほどきを一ヶ月だけ日本の先生にしてもらい、後は台湾と言う環境で独学、そして六十歳を越してからやや満足のいく程度になった。

さて、ついでに、台湾語、日本語、北京語の他に、習った言葉を挙げれば、英語、ドイツ語、ラテン語、そしてフランス語がある。英語は中学一年から、ドイツ語とラテン語は旧制高校の理乙に在籍したため、そしてフランス語はカリフォルニア大に留学した時、博士課程で要求された外語能力テストのために習ったものである。当時のカリフォルニア大バークレイ校の生物化学科では、

博士課程において外語二種類の読書能力が要求された。北京語と日本語も認められたが、二つとも「国語」として使ったものである、外語として試験を受けるのは後ろ冷たい。それでドイツ語とフランス語の試験を受けた。ドイツ語は旧制高校で習ったからあまり準備は要らなかったが、フランス語はフランス語を眼で読んで英語に直す授業をとって何とかパスした。だからフランス語の学習は1945年にやった北京語学習のやり方に似ている、即ち何とか読めてもしゃべれない。

言葉は使わなければ忘れてしまう。ラテン語は解剖学用語や動植物の命名の為に習ったようなものだから、そんな仕事と縁がないので全く忘れてしまった。1958年にドイツ語の試験を受けてから今まで、用事でドイツ、スイスに行った場合以外、ドイツ語にお目にかからない、だから今のドイツ語学力は白紙に戻ったとあってよかろう。専門の生物化学の世界では英語の読み書きと喋りが必須である。英語は戦争中、敵性言語として軽んじられ、授業時間が大いに削減されたと覚えている、戦後の学習では、独学に頼る事が多かったが、必然的に読まされる教科書や文献、趣味で読む雑誌や小説、それに町でも良く売られていたレコードによる会話練習など、やる気があれば相当に腕を挙げえた。日本語は幼少時からの鍛えと、今でもよく日本の書籍を読み、テレビ番組を見るから忘れようが無い。台湾語と北京語は台湾の社会用語である。今の生活では英語、北京語、台湾語と日本語が密接に使われる。これ等の言葉を自由に使うには大変な労力と努力を支払ったのだが、多言語習慣が定着すると、言葉の間での転換はどうやら翻訳の過程を経ないようである。こういう脳の使い方は、或いは痴呆症の予防になるのではないかと考えたりする。そして実務的には国際化の社会において、随分役に立つ事もある。そうでもなければ、言葉との闘争に多くの時間とエネルギーを注ぎ込んだ甲斐が無いではないか。

(2005/08/10)